にじのはし幼稚園
園だより

令　和　４年　９月　号
港区立にじのはし幼稚園
園　長　　石　川　典　子

みなさま、楽しい夏休みをお過ごしでしたか。いよいよ２学期が始まります。今学期も一人ひとりを育む質の高い教育を行います。ご理解・ご協力お願いいたします。

にじのはし幼稚園の教職員は、質の高い教育の実現に向け、指導力向上を目指し、研究を推進しています。

自ら資質を高め、研究に励み努め、 全ての子どもたちの可能性を引き出す、
個別最適な学びと、協働的な学びの実現に向け、
指導の改善・工夫をする教職員

７月の園内研究会では、東京大学大学院教育学研究科教授　遠藤 利彦先生から、『乳幼児期における アタッチメントと非認知的な心の発達－自発的な遊びを支え促す「安心の輪」－』についてご講義いただきました。

好奇心を満たす自発的な「遊び」こそ真の「学び」であり、アタッチメントがもたらす安心感に支えられ子どもは思い切り自発的に遊ぶ中で、自分の頭で考え抜く力（＝主体的で深い学び）、他者と共同して学ぶ力（＝対話的で深い学び）が実現するとのことです。

幼児は質の高い遊びの中で最も頭を使います。乳幼児期には、何かができるようになる、知識が豊富、ということが大事なのではなく、頭を使う経験がどれだけ豊かにできているかが大事です。頭を使う経験により考える力が育まれます。これは、文字や計算などの知識を学んだり覚えたりすることではなく、自発的な遊び＝乱雑の中の「探索」（内容ややり方などが決まっていない中で、自分の目的に向けてあれこれ試行錯誤すること）により実現します。そして、その後の生涯にわたり、主体的で柔軟かつ創造性豊かな日常生活の基盤を形成することができます。

本来、人間は自発的に行動したいという欲求をもっています。しかし『何歳までに〇〇ができるようになる』など思い通りに育てようとすると、自発的な遊びができなくなります。他人からの評価や報酬が目的に代わると、その達成のためにやらされている感覚が生じます。自発的な動機が失われ、やらされている感覚が強くなり、自発的に行動したいという本来の欲求が叶わなくなり、次第にやる気を失ってしまいます。子どもに何かを教え込めば吸収しますが、「すごいことをさせる」ことは、長期的に見ると意味がありません。

私たち大人（教職員や保護者の方）は、子どもの後ろをついて回ったり、先回りしてコントロールするのではなく、避難所・基地として見守り、探索を促すことが大切です。

子どもが自発的な体験を通して「気付き、考え、行動する」ことができるよう、今学期も園と家庭とが両輪となって子どもたちの豊かな生活を支えていきましょう。